とあるヲタク女の災難。

SUN'S

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、フレンドの「クロム」のオススメしていた魚介類の生息している「深海エリア」へと来ていたヲタク女はアホみたいな性能のスキルを獲得してしまう。

「私はイカよりタコの方が好きよ?」

目　次

第１話 ―― 1
第２話 ―― 3
第３話 ―― 6
第４話（メイプル） ―― 8
第５話 ―― 11
第６話 ―― 13
第７話 ―― 16
第８話（サリー） ―― 19
第９話 ―― 21
第１０話 ―― 24

第1話

○月%日

先日、フレンド登録を交わした大盾使いのクロムから聞いた魚介類の生息しているエリアに来ている。

うん、イカよりタコの方が美味しい。

いつもは体型を気にしてリアルだと食べ過ぎることを控えて小食気味だったけど。このゲームなら幾ら食べても料金は必要ない。

先ずは好物のタコは絶滅するまで食べよう。

私に向かって墨を吐いてきたタコの頭部を握り潰し、墨を吐くタコを口の中に押し込む。しかし、こうなると醤油や山葵が欲しくなる。

まあ、そっち系のアイテムは追加要素と考えるか。

目の前を横切ろうとしたタイを捕まえ、尾びれから頬張るように食べる。うん、これは少しだけ苦くてゴーヤのような風味だ。

しかし、魚介類なのに野菜の味を楽しめるのは嬉しいのだが、こうも同じタコを食べるのは些か飽きてしまう。もっと美味しくて派手な見た目のタコはいないだろうか？

今までのタコよりも美味しそうなタコを探すために深海へと行き先を変更する。食べるだけでレベルは上がるし、何から何まで良いことばかりだ。

○月∩日

深海エリアの探索を終えた記念として待ち構えていた百メートルは越えていそうな毒々しい見た目のタコを食べてきた。さっきのタコは浅瀬を泳いでいたタコより刺激的な味だったし、いつの間にかスキルを獲得していた。

とりあえず、タコは二日ほど食べるのは控えよう。今度は岩場に隠れてそうなエビみたいな甲殻類を重点的に絶滅する寸前まで食べ泳ごう。

それにしても「魔蛸の八本足（クラーケン・ウィップ）」なんて食べ物を捕まえるにはうってつけのスキルだ。まあ、見た目はタコの触手を生やす魚人間みたいになるんだけど。

ふおおぉ、宝石のような甲殻を持つエビなんて見たことないよ。

この優美な見た目からして高級食材という感じが溢れ出てる。

それに、これが美味しくないなんて有り得ない。

そんなことを思いながら海草の生い茂る岩の間へ逃げ込もうとした宝石海老を「魔蛸の八本足」にて縛り上げ、ハサミから味わうように食べる。

○月○日

なんか気付いたら色々とスキルが増えてた。たぶん、この宝石海老から獲得した「硬化皮膚（ハードウェア）」は物理ダメージ減少の効果を付与してくれる。

あんまり強そうなスキルじゃなさそうだけど。この「魔蛸喰らい（クラーケンイーター）」は水属性の攻撃を無効化する代わりに火属性の攻撃を受けると通常よりも多くダメージを受ける。

これは服のスロットに入れておこう。

まあ、これぐらいスキルは貰えるのは嬉しいけど。食べ物に関係するスキルは一つも出てこなかった。やっぱり、もっと食べないと出ないのかな？

そんなことを考えながらグロテスクな色彩のタコを食べていると「魔蛸の擬態（クラーケン・ミミクリー）」という新しいスキルを獲得した。取得条件は「百体の魔蛸を食べること」とのことだ。

このスキルの特性はスロットした部位の不可視化というモノであり、私の「魔蛸の八本足」と相性は良さそうなモノということは理解した。

先ずは触手の生え際辺りに「魔蛸の擬態」をセットしておこう。うん、予想通りにすべての触手が見えなくなった。しかし、接触しても不可視の状態を継続するのは強すぎるんじゃないか？

第２話

△月〉日
早朝、タコの絶滅した海域を泳いでいるとクジラのような生き物を見付けた。私のアバターより百倍は大きな身体さだけど、内側から食べれば問題ないはずだよね。
海底へと向かって泳ごうとするクジラの口を抉じ開け、喉を通って胃袋らしき場所で両の手を合わせて「いただきます」と言いながら胃袋を噛み千切り、クジラを内側から補食する。
三時間ほど食べ続けていると「暴食」という新しいスキルを獲得した。ずっと食べ続けることで出現するスキルってテキストにはあるけど。
私は三日前から魚介類を食べているけど、昨日もスキルは出現しなかったし、考えられるのは今日から加えられたスキルということだ。
あんまり難しいことを考えるより今は「魔蛸の八本足」の操作に慣れよう。まあ、魚介類の次はリアルで嫌煙してる虫を食べてみようかな。
そんなことを考えながらクジラの残骸を潜り抜け、消滅していくクジラを見詰める。そこまで美味しくなかったけど、今度からクジラも絶滅するまで食べることを密かに決意する。
△月∀日
夕方、クロムから届いたメッセージを確認する。
どうやら第一回イベントに参加しないかというお誘いメッセージと今もログインしているのかという確認のメッセージでもあるようだ。そう言えば一週間ほど海岸から出た記憶がない。
あとでイズにも食べることの出来る魚介類を渡しておこう。もしかすれば、このイベントで私の趣味嗜好を分かち合える心の友を得ることが出来るかもしれない。
そんなことを考えながらヤシガニのような生き物を「魔蛸の八本足」で叩いていると触手の一本がヤシガニに切られ、僅かにＨＰが減ってしまった。

とりあえず、このヤシガニをイベント開催まで食べるなり叩くなりしてレベルを上げよう。あんまり効果は無さそうだけど、無理するより安心安全なレベリングのはずだ。
ペシペシと触手を使ってヤシガニをボールのように弾いていると「乱打」という連続攻撃のスキルを獲得した。攻撃速度上昇効果があるスキルなのかと思いながらヤシガニを叩く速度が、ほんの少しだけ上昇していた。
あんまり叩くと食べる前に消えそうだし、そろそろ弱ったヤシガニは食べて、次のヤシガニを探すために浜辺を散策するとしよう。
△月#日
なぜか「乱打」は「乱打殴打」へと変わり、常時発動型スキルに変更されていた。どういう理由で変更したのか、少しだけ気になるけど。
とりあえず、今日はグロテスクな色彩のヤシガニを探して食べよう。この前のタコみたいに変なスキルを貰えるかもしれないし、食べる口実が出来たので嬉しいかぎりだ。
そんなことを考えながらヤシガニを探しているとダイミョウザザミみたいなヤシガニを見付けた。早速、フレンドのためにも実食してみよう。
うん、硬くて噛めない。
先ずは甲殻を壊してから殻を食べて歯の強度を上げるとして、ずっと殻を食べるのは嫌だからね。壊れた場所を重点的に食べ進めていこう。
食感はブロッコリーみたいだけど、なんでか味はカニカマと似ているという不思議な食べ物だった。まあ、私はダイミョウザザミを食べれて満足だね。
よく分からないスキルも手に入ったし、ちょっとだけスキルを試しておこうかな。それに、この「下級回復魔法」は死にそうなモンスターの傷も癒やすことが出来るみたいだし…。
普通のヒールより消費ＭＰは多いけど、使い方次第では強くなるかもしれない。そうと決まれば食べながら癒やすを繰り返して立派な

回復魔法を育てよう。

第3話

仝月～日
イベント開始と共に転移した場所を見渡す。思っていたより遮蔽物が多くて嫌になるな。とりあえず、のんびりと触手を使えそうな場所を探そう。
そんなことを考えながら伸ばしていた触手を踏んだプレイヤーを叩き上げ、運営側の宣言を聞くまでペシペシとプレイヤーの頭を叩いて倒す。
私は、この日のために用意しておいた深海エリアのブリを頬張りながら歩いていると毒沼のようなモノが広がっていた。
特殊なクエストでも発生したのかと思いながら毒沼の発生源を探していると女の子を見付けた。それにしても私はプレイヤーを食べる大盾なんてクロムから聞いたことないんだけど。
大盾を構えようとした女の子へ敵意はないことを伝え、ちょっとだけ休憩する場所を貸してもらえないかと相談すると疑うこともせず了承してもらえた。
確かに他人を信用するのは美徳だけど、他人を疑うことも覚えないと世渡りなんてマトモに出来ないと思うんだよね。一応、年上のアドバイスは受け取って貰えると助かるかな。
まあ、今は雑魚を片付けようか？
仝月≠日
第一回イベントは四位だったけど、面白そうな女の子とは友達になれたから良しとしようか等と思いながらメイプルと一緒に深海エリアで二時間掛けて捕まえたブリを頬張る。
うん、今日も今日とて魚介類は美味しいね。
ハムハムと一生懸命にブリを食べるメイプルより食べるのが速いのは「暴食」の影響だと思うけど。この世界で食べる速度が速くなるってスキルは必要なのだろうか？
そんなことを考えながらブリを食べ終えたメイプルにハンカチを手渡し、口元の食べ残しを指摘すると恥ずかしそうにハンカチで拭い

ている。
　とりあえず、今後の目標はメイプルより奇々怪々な生き物を食べることだし、今回のイベントはメイプルという食べ歩きの友達を得たと考えれば良いことばかりだ。
　ログアウトしようとするメイプルを呼び止め、私の知っている美味しい生き物の多いエリアを教える。もしかしたらバッタリと会うかもしれないからね。
　まあ、それより今は毒竜の味を教えて貰えると嬉しい。いったい、どんな道具を用いて毒竜の身体を食べたとか聞かせてほしい。そんなことを言いながらメイプルを見ると既ログアウトしていた。
　むう、今度の楽しみに取っておくとしよう。
　仝月≦日
　私は毒竜の生息しているダンジョンへと来ている。メイプルの話を聞いたら食べてみたいと思うのは美食家として当然のことだ。
　そんなことを思いながらも飛んできたスライムを掴んで啜るように飲み干し、ハチやテントウムシのような生き物をスナック感覚に捕食する。
　最近の毒はピリッとしていることが分かった。今後は毒瓶を調味料として集めておこう。しかし、猛毒の竜と呼ばれるだけあった。
　メイプルの話していたように毒竜を食べようと「魔蛸の八本足」を伸ばしたら溶かされるのは予想していなかった。まあ、触手なんて押さえ付けることが出来れば溶けようと問題はない。
　まあ、毒竜は激辛麻婆豆腐のような味だな。
　あれは現実だったら二時間は掛かる辛さだと思うんだが、メイプルなら共感してくれるはずだ。そして、なぜか「毒無効化」というスキルを獲得してしまった。
　これだと毒の辛味を味わえなくなるじゃないかと思いながらメイプルの分泌した猛毒の液体をメバルに垂らして食べる。
　ちょっとだけ山葵のような風味を得ることが出来たので良しとしよう。とりあえず、今日もタコを食べてからログアウトしようかな。

第4話（メイプル）

「あのリブラさん、この魚って何処で捕まえたんですか？」
パリパリとした歯応えのメバルを食べながら襲ってくる人達を「悪食」と「毒竜」で倒しつつ、ずっしりとしたブリを食べているリブラさんに尋ねる。今日、はじめて会った人に教えてくれるかな？
そんなことを考えながら丸焼きのヤシガニを渡してくるリブラさんを見上げる。私より20センチは高いかな？なんて思いながらリブラさんの見えない攻撃をジーッと見てるのに見えない。
柱の向こうで「どうすれば攻略できんだよ」とか「知るかよ、あの大盾が厄介すぎんだ」なんて話し声が聞こえてきた。ふっふっふっ、私の大盾を破ろうなんて百年ぐらい早いんじゃないかな。
「一斉に掛かれば片方は倒せるはずだ！」
「「おおおおぉぉぉぉぉ!!」」
「パラライズシャウトっ！」
「「「ぐはぁぁぁぁ!?」」」
ズザザァーッと滑り込んでくる人達を「悪食」で倒しながら回っていると、私と同じように大盾を構えた人達が壁に磔になったままリブラさんの見えない攻撃を受け続けている光景を見てしまった。
たぶん、あそこで休憩することを了承しなかったら私もあんな風に攻撃されてたのかな？そんなことを考えながらリブラさんを見ていると後頭部をピコピコハンマーで叩かれたような感じがした。
「えぇっ、なにそれ…」
私の頭を叩いた人は壊れた武器を見ながら有り得ないモノを見るように私のことを見ていた。むう、それは失礼だと思うんだけどなっ！
「よいっしょぉ!!」
出来る限り大きく範囲を広げるように思いっきり闇夜ノ写を振り回し、射程範囲へと集まったことを確認してから「毒竜」を使って毒殺する。この言い方は好きじゃないけど、他に例え方が思い付かないんだよねぇ…。

私の周りには一人も居なくなったことを確認する。残ってた人ははリブラさんのところに行ったのかな？等と思いながらリブラさんに歩いていった方へと向かう。
両の腕を組んで空に立つリブラさんと見えない攻撃を受けている人達が見えた。どういうスキルを使えば空を飛べるようになるのかな？

1：名無しの大盾使い
知り合いのプレイヤーが無双してた。

2：名無しの剣使い
ほう、男かね？それとも女かね？

3：名無しの槍使い
それより無双プレイヤーの情報をくれ。

4：名無しの大盾使い
そう、慌てるな。この前のイベントで大盾使いの女の子と一緒に戦ってた有り得ない飛行や不可視の攻撃をするヤツだ。
はじめて、会った時は食べ歩きが趣味の真っ当なプレイヤーだったけど。一週間ほど音信不通かと思えば化けもんになって帰ってきた。

5：名無しの杖使い
えっ、なにそれ怖い

6：名無しの剣使い
それには同意しよう。
あの見えない攻撃を受けた者として忠告できることは「ヌメヌメしてる」から武器を落とさないように気を付けることだなれ

７：名無しの槍使い
ああ、あのヌメヌメしたヤツな。どんなスキルを使えば攻撃をヌルヌルに出来んだろうな。

８：名無しの杖使い
ヌメヌメなの？ヌルヌルなの？

９：名無しの弓使い
気付いたら目の前でブリを食べてる美人がいたんだけど。この人であってるのか？

１０：名無しの大盾使い
そいつで合ってるけど、飯食ってる時は邪魔するなよ？キレたら辺りの地形なんて簡単に壊しそうなヤツだからな。この前なんて一人だけで深海エリアのモンスターを食い散らかしてたらしい。

１１：名無しの弓使い
なんだ、ただの化けも……

１２：名無しの大盾使い
くそっ、遅かったか…！

１３：名無しの杖使い
えぇっ、ほんとにやばいやつじゃん

第5話

∀月〃日

今日は竹林エリアへ来ている。目当ての品はタケノコとイノシシである。そして、出来ることならウリボウをペットとして飼いたい。ちょうど掘り返せそうなタケノコを引っこ抜き、口の中に放り込んでガリガリとした歯応えを楽しんでいると武器を構えたオッサン達が道を塞ぐように立っていた。

私の食事を邪魔するなんて最低最悪の奴らだと思いながら「魔蛸の八本足」を使って縛り上げ、どこへ投げようかと考えているとスキル限定進化という項目が出てきた。

タケノコを食べながら限定進化の選択肢を選んでいるとオッサン達が一人残らず消滅していた。また、襲ってきたら対策を考えようかな。

鬱陶しいほど生い茂る竹を薙ぎ倒し、進んでいると白毛のイノシシが歩いているのが見えた。なぜか三面六臂の鬼神を乗せている。

ひょっとして竹林エリアのボスだろうかと思いながら「魔蛸の八本足」で徹底的に叩き潰したけど、再生と切断を繰り返して七十一本ほど触手を持っていかれた。

∀月≦日

スキルの調整を行うために隠れた名店というエリアに来ている。ここはモンスターを百体ほど食べないと出現しない限定エリアとのことだ。

クロムやイズには伝えてあるが、モンスターを食べるのは抵抗があるらしく。今のところエリアに居るのは私だけなので、料理を独り占めすることが出来て良いことばかりだ。

それに今日は鬼神から貰ったスキルの調整しているだけだし、使えそうだったらスロットにでも付けようかとNPCに運ばれてきたステーキを頬張りながら考える。

とりあえず、この「摩利支天の化身（マーリーチ・アヴァターラ）」を試すのは人のいないところで使おう。いきなり、顔が三つになったり腕が六本になったりすると

モンスターと間違われそうだし…。
　あとは、この前のイノシシの眷属を呼び出せる限定発動型スキルだけかな。ウリボウだと嬉しいけど、あのイノシシの眷属を考えると厳つい奴しか思い浮かばない。
　そんなことを考えながら「摩利支天の化身」を発動すると視界が広がり、左右がハッキリと見えるようになったけど、あと少しだけ視界を広げれば後ろも見えそうだな。
　まあ、六本の腕を動かすのはコマンド入力にしておけば良いかな。あんまり「摩利支天の化身」は使いたくないけど。
∀月∴日
　メイプルと知らない女の子を見付けた。どうやら白鱗を取るために洞窟の中の泉に向かうとのことだ。そう言えば白魚を食べていなかった。
　私も同行して良いだろうか?等と問えば「メイプルが良いなら私はいいけど」とサリーと名乗る女の子は了承してくれた。
　よし、そうと決まれば三日ほど疎かにしていた魚介類を食べるとしよう。あとで白鱗は渡すから捕まえた白魚を貰えると嬉しい。
　私は未知なる世界を冒険するより未知なる味を探求したいだけだ。それに私は集めた食材を使って、料理を作れるスキルが出てくるの待っているんだ。
　まあ、そういうことだ。
　美味しいモンスターを食べるのは楽しい。
　そして、なによりゲームを作った運営側の驚くような仕掛けがあるかもしれない。それに見たことないモンスターを食べれば毒を食らうし、麻痺になることもあるけど。
　それも慣れれば問題ないし、刺激的な味を楽しめるから良いことばかりだ。そんなことを話しながら歩いていると洞窟の入り口へと到着した。
　それじゃあ、メイプルの欲しがってる白鱗を手に入れるために泉の白魚を絶滅させよう。ああ、絶滅って言っても食べ尽くすだけだよ?

第6話

◇月▽日
いつもと変わらずイズの店は繁盛している。美人な鍛冶屋は儲かるというのは事実のようだ。そんなことを考えながら一週間ほど前に頼んでいた九つの日本刀を受け取る。
お好みの名前を入力していいと言われたが、最初から決めていた名前を入力しておいた。私の尊敬する数少ないキャラの武器の名前だ。そう、この九つの日本刀はロロノア・ゾロの技を再現するために必要なモノなのだ。ちなみに三振り目は「秋水」ではなく「雪走」である。
私は秋水より美しい波紋を持つ雪走の方が好きなので好みの違いで友達とは口論になりそうだ。それにイズの腕前が噂通りで助かった。
こんな同質の武器を九本も作ってくれるのは彼女ぐらいしか居ないだろう。そんなことを考えながら頭部のスロットに「和道一文字」をセットする。
魚介類を捕まえる時に偶然とはいえ武器を噛めることが分かって良かった。うん、これほど嬉しいことは食事の次くらいにない。
右腰に三本の刀を揃えるように佩いて二刀流や一刀流を店の近くにある空き地にて試す。握りは良いけど、筋力の無さで振るうのが遅いのかな。
◇月÷日
第2階層の建設を終えたという告知を受け取り、第1階層から人が減ってきた。そろそろ私も新しい食材を求めて、第2階層へ行こうかな。
ゴリゴリとした食感の石のようなトカゲを食べながらダンジョンへ向かっているとクマみたいなモンスターが出てきた。雪走を両の手で握り締め、高く刀を振り上げて特攻するように振り落とす。
ふむ、ゲームの補正効果の影響で見様見真似とはいえロロノア・ゾロの使っていた一刀流〝大辰撼〟の精度は上がっている。

そんなことを考えながら両断したモンスターが消える光景を見て後悔する。あれは生きたまま食べればクマの味を知ることが出来たのに、なんで斬っちゃったのよ。
自分の過ちを慰めるようにウサギを食べながらダンジョンの通路を歩いていると、メイプルとサリーが後ろからやって来るのが見えた。
メイプル達も第2階層を目指しているそうだ。
私はソロで来てるけど。いや、二人のパーティーには入らないよ。
まあ、先駆者としてボス攻略のヒントを残してあげよう。
戦うところを出入り口の近くで観察するのはシステム的にも問題ないし、パーティーを組んでないなら攻撃を受ける心配もないよ。
◇月?日
やっぱり、今時の女の子は漫画より可愛いものが好きなのだろうかと思いながらも昨日のシカを倒している光景を運営側に録画されていたようだ。
広場にて三刀流を使っている私が映っていた。まあ、誰かに見られても興味ないし、襲ってくるような相手はいないはずだ。
そんなことを考えながらハムハムと隣でクレープを食べるメイプルを見る。なぜか三刀流のようなスキルが欲しいと言っているのだ。
しかし、私はスキルというより趣味の延長で三刀流を使ってるようなモノだからね。それほど接近戦で二つの盾を使うキャラなんて居たわね…。
それでも大盾使いのメイプルには円形の盾は不向きのような気がするし、本人には聞いておいた方が良いのだろうか?
とりあえず、説明だけしておこう。
私の知ってる人なんだけど、その人は二つに別れる円形の盾は持っていてね。打撃技と盾を組み合わせていた。やっぱり、仮面ライダーオーズのブラカワニはカッコいい。
あとで動きは教えるけど。
今からイズのところで半月型の盾を二つほど作って貰うのもいいかな。そうすれば両の手に盾を装備できるし、近付いてきた相手を

「シールドアタック」で叩けば攻撃もできる。

第7話

ゑ月？日

最近の女の子はアグレッシブ過ぎじゃない？等と思いながらも千年亀の甲羅を素材として作った半月型の盾を両の腕に装備したメイプルを見る。

　ＳＴＲ依存のシールドアタックでも使い方を変えれば攻撃へ転換することは簡単だ教え、メイプルと同じように半月型の盾を装備して動き方を見せながら説明する。

　そのためにＶＩＴよりＳＴＲを高くした盾を装備するんだ。シールドアタックは教えた通り、ＳＴＲ依存のスキルなのは事実だけど。

メイプルが極振りを止めずに攻撃するには武器や防具に攻撃力を付ければ良いということだ。先ずは半月を満月とする腕の構えを取り、そのまま攻撃を受け流す「体捌き」を行う。

　ほら、これで「悪食」を使わずに攻撃を反らすことが出来るようになった。あとは相手の攻撃を見ることで攻撃の軌道をずらし、がら空きの脇腹や頭部を殴ってダメージを与える。

それじゃあ、私と実戦しようか。

べつに迷惑とか思ってないから初心者や困ってる人を助けるのもオンラインゲームの醍醐味みたいなところもあるからね。

ゑ月↑日

とりあえず、メイプルの先生は止めよう。

あの防御力を突破するのは貫通攻撃を強くしてないと無理としか言えない。人目を避けて「魔蛸の擬態」を解除したのに百一本も触手を叩き潰されるとは思いもしなかった。

　私の教え方は良い方だと思うけど、シールドアタックから麻痺攻撃されたら死ぬのは当たり前だ。そんなことを考えながら私の触手と戯れるメイプルを見上げる。

　私の全力の攻撃を受けてもＨＰは減らないし、私はシールドアタック改め盾殴りのせいで「下級回復魔法」が「中級回復魔法」に進化した。

どういうパンチを打てばＨＰ半減するのだろうか？なんて考えながらメイプルをお姫様抱っこの体勢でキャッチする。とりあえず、この触手のことは秘密にしてくれると嬉しいかな。

　そんなことを話しながら「魔蛸の擬態」を付け直した「魔蛸の八本足」でメイプルを持ち上げる。本当なら掴んだだけで攻撃を与えるけど、メイプルのＶＩＴを破るのは無理なようだ。

　まあ、困ったら三刀流を使おうかな。それに数十年前の漫画を集めるのは私ぐらいしかいないだろうし、このままヲタク仲間を探すのも良さそうだ。

　空飛ぶメイプルを見上げるプレイヤーを掻き分け、メイプルの友達を探していると「サリー、此処だよぉ～っ！」とメイプルが私の上で叫んでいる。

　とりあえず、そろそろ降りようか。

ゑ月／日

早朝、第二回イベントを楽しむためにソロで挑もうとしていたらメイプルに捕まった。パーティーは組まないけど、メイプル達のメダル集めには協力することを約束しよう。

　私の目当てはイベントでしか現れないモンスターを食べることだ。もしも見たことないモンスターを見付けたら呼んでくれると嬉しい。

　そんなことを話しながらイベント開始の合図を待っていると広場から森林エリアへと飛ばされた。むう、フレンド登録しているとはいえメイプル達と離れすぎているな。

　とりあえず、メダルを集めながらモンスターを食べ尽くすとするか。目の前を横切ろうとしたゴブリンを捕まえ、首筋を噛み千切って捕食する。

　私は「暴食」の影響で食べれば食べるほどＳＴＲを上げることが出来る。まあ、最大「１０」までしか上がらないスキルは意味無いだろうけど。

　ゴブリンを食べていると巨大なゴブリンが木々を薙ぎ倒しながら出てきた。

　これはゴブリンの王様のようなモンスターだろうか？等と考えな

がら「魔蛸の八本足」を使って押さえ付け、喉仏を噛み千切って捕食する。

うん、こいつは不味いヤツだった。

第8話（サリー）

メイプルは自分の切り札である「悪食」を温存するのためにリブラさんからアドバイスを貰ってきたことを嬉しそうに話している。あの人を信用していない訳じゃないけど、そんな簡単に切り札を教えても良いのだろうか？

そんなことを考えながらゴブリンの振るう短剣をずらし、がら空きのボディに強烈なパンチを叩き付けるメイプルを見詰める。ひょっとして、あの人もメイプルと同じタイプの人間なんじゃあ…。

リブラさん曰く「大盾使いと小柄ほど視界の半分を潰す」と言っていたそうだ。確かにメイプルの身長だと大盾を使えば前を見えなくなるし、私の攻撃や退路を塞いでしまう可能性がある。

それにリブラさんはメイプルと一緒に魚介類を美味しそうに食べていた。あの人はゲームの中で見付けた未知の味を楽しんでいるのか、それともモンスターを食べることでアブノーマルな欲求を抑えようとしているのか。

「シールドアタックっ！」

メイプルは両足を入れ換えてパンチを打ちやすい体勢からアッパーのように放ち、ゴブリンを洞窟の天井まで叩き上げている。

さっきの「シールドアタック」はＳＴＲ依存スキルだってことはメイプルに聞いてるけど、どれだけ盾のＳＴＲを上げたら敵を叩き上げることが出来るようになるのよ。

「サリー、そっちに行ったよ～っ！」

「スラッシュ…！」

後ろ腰の差していた水底のダガーを振り上げ、ゴブリンを真っ二つに切り分ける。メイプルより真っ当なステータスを作ろうかと思ってたけど、このままだとメイプル色に染まりそうだなあ…。

いや、それは悪い意味じゃないけど。

うん、メイプルよりリブラさんは少しだけマトモなステータスだと思ってたけど、あの人もメイプルが言うには「毒竜」よりもスゴいスキルを持ってるみたいだし、敵対するのは得策とは言えないかな。

「サリー、あの空飛ぶタコってなにかな！」
　そんなことを叫んでいるメイプルの指差す方角へ顔を向けると気の抜けそうな顔の紫色のタコが「飛ぶ」というより「跳んでいる」のが見えた。
「なにあれ、えっ、ボスなの？」
　いろいろなモノを吹き飛ばしていたタコの触手が物凄い勢いで伸びてきたかと思えば雪山の付け根辺りで止まった。ちょうど飛び乗ることが出来そうな位置だけど、あれから敵対している反応はない。
　この卵みたいに友好関係を築くことが出来るモンスターなのかと考えながらメイプルの意見を求めようと視線を動かすとタコの触手の上に乗ろうとしているメイプルが視界の端に映り込んだ。
「なにやってるのよぉぉぉ!?」
　なんとか「超加速」を使ってメイプルを捕まえたけど。タコの触手は目の前まで迫っている。
　こんな巨大モンスターと戦うのは今のレベルじゃ無理なのは分かり切ってるのに、メイプルは楽しそうに「リブラさん、おっきくなりましたね！」と話している。
「ねえ、このタコってリブラさんなの？」
　こんなモンスターみたいな見た目だったかな？等と考えながら吸盤に乗ったかと思えばタコの頭の上に降ろされ、雪山で見えた景色より綺麗な世界が広がっていた。ああ、ゲームだって分かってるのに感動してきた。
「リブラさん、そのまま前進してください！」
「いや、流石に乗り物みたいに扱うのは…」
「えっ、でも、海に向かってるよ？」
　この人もメイプルと同じで難しいことを考えずにゲームを楽しんでるのは分かった。それでも降りる場所もないのに、どうやってメダルを集めれば良いんだろうか。
　そんなことを思いながら綺麗な青空を眺めているとプレイヤーが弾き上げる触手が見えた。あんまり深く考えるのはやめよう。

第9話

━月ч日
私はボスを倒してメイプル達の抱えていた卵とは色彩の違う卵を手に入れることが出来たけど、なんで軍鶏なのだろうか?
　確かに軍鶏は美味しいけど、個人的には地鶏の方が美味しくて好きなんだよね。そんなことを考えながら卵の欠片の変化した指輪を右手の親指に嵌める。
　あんまり装飾品を着けるのは好きじゃないんだけど。この軍鶏を育てるためには必要みたいだし、深く考えるのは面倒だからやめよう。
　それに名前を付けるなんて久し振りのような気がする。オトモは「ロドリゲス」って名付けてけど、軍鶏の名前なんて考えたことないし……。
　とりあえず、この子の名前は覇王丸かな。
　そんなことを考えながら雄々しく翼を広げる覇王丸を頭の上に乗せ、イベント終了間近なので卵の場所を教えてくれたメイプル達にメダルを譲渡する。
　この覇王丸は食べられないし、似たようなモンスターを見付けたら食べてみようかな?等と考えていると覇王丸が頭の上で「コケェーッ!」と叫ぶ。
　これは目覚ましにはうってつけだけど、頭の上で鳴かれるとビックリするからやめてね?

━月℃日
やっぱり、この前のダイオウイカのせいで防具も着けずにモンスターと殴り合えるほど強くなってた。あのダイオウイカはイベント限定なのかな?
　そんなことを考えながら「魔海の船落とし(クラーケン)」を発動し、メイプル達のために滑り台の真似事を行う。
　今の私は移動や戦闘はで触手を使ってるし、あんまり難しいことは考えずに階層を一周することが出来るのは楽しいとのことだ。

なぜか経験値を貯蓄することが出来るようになったり、ダンジョンの一室にて長時間の活動や能力補正が付与されたりと不可思議なことが起こっている。

もしや運営側の策略なのだろうか?·なんて思いながらも散歩の途中でクロムとイズを見付けたので頭の上に乗せておいた。

今日は私のオススメする食材の集まる場所へ案内してあげよう。あんまり口外することの出来ない場所にあるし、このまま進んでいこう。

そして、私の半径10メートル以内の仲間に対して「水中呼吸」及び「高速潜水」という特殊な効果を付与することが出来るようになっている。

たとえ深海エリアだろうと私の近くにいれば窒息の危険も無くなるということだ。なにより向かっているのは深海の更に奥底にある海底エリアである。

━月Å日

先日のイベントから程なくして光虫というギルドホールを購入するために必要なアイテムをドロップするモンスターが追加され、私は光虫を食べたのに身体がギルドホールにならなかった。

バリバリとした光虫を食べながら広場にて休んでいるとメイプルとサリーがギルドを購入することを話し合っていた。

そう言えば光虫からドロップしたアイテムは必要ないから転売してしまった。あんまり考えてなかったけど、自分だけの拠点を手に入れるということは家賃を払わずに済むじゃないか。

そんなことを考えながら食べていた光虫がアイテムを落とした。とりあえず、このアイテムを使ってギルドを購入した方が良いんだよね。

人通りの少なそうな場所を探しながら町の中を探索しているとメイプル達と遭遇した。ここは広場から離れていると思うんだけど、二人は色々と物色しているんだな。

二人の行動範囲の広さに感心していると勧誘されてしまった。しかし、私みたいな食べることしか考えていないヤツを仲間にしてもい

いのか？
　そう、私の前に立つ二人に問えば「リブラさんは食べること以外にも色々と手助けしてくれたじゃないですか」と言われてしまった。そこまで手助けしたような覚えは無いんだが…。

第１０話

凵月↓日
先日、メイプルの設立した「楓の木」は色物しか集めない傾向でもあるのだろうかと思いながらもクロム達を連れて第三回イベントで必要な素材採取へと向かう。
情報通のクロムの話によるとヒツジの毛を刈れば専用の装備を作ることが出来るそうだ。私はヒツジを食べたいけど、今回は素材集めに勤しんでいる。
私の知らない人もいるが、メイプルの友達ならマトモな人なのだろう。そんなことを考えながらカスミの振るう太刀を見る。
そして、なぜか三刀流を使って欲しいと言われた。あの映像を見たのかと思いつつ、カスミの要望通りに「和道一文字」を銜えて両の手に武器を構える。
あんまり人前では使うのは控えたいんだけど。
ギルドの仲間には攻撃手段を教えておかないとダメだそうだ。イズの話は信用できるが、本当のことなのだろうか？
逃げ惑うヒツジの群衆へと三振りの刀を構え、握りを確かめながら「超加速」を用いて三刀流〝鬼斬り（毛刈り）〟を放ち、左手で銜えていた「和道一文字」を白塗の鞘に納める。
その拍手の意味はなんなのだろうか？
凵月＆日
カスミと共にアニメの剣術を再現することが出来るのかという検証を行いつつ、飛天御剣流と牙突の再現は可能ということが判明した。
それに飛天御剣流を使おうとするカスミの速さは凄まじいとしか言えない。カスミとサリーの速さは同等だが、加速すれば加速するほど飛天御剣流は脅威となるのは当然のことだ。
私の顕現した「魔蛸の八本足」を一瞬にして切り落とし、首を断つために詰め寄ってきた時は驚いた。まあ、その程度のことは想定していたけど。

だいたい、奥義を連発するのはダメだと思うんだけど。そんな話を繰り返しているとクロムが微笑みを浮かべながら高速タイピングしていた。

また、書き込みしてるのか？等と言いながらクロムの入力している掲示板を肩越しに見る。むう、確かに三刀流の剣士と桜の剣士の剣術合戦というのは言い得て妙ではあるけど。

ガブリとクロムの首筋を噛んで微量ではあるけど。それなりにＨＰを削りながら変なことを書くのは止めてほしいと頼んでみる。

しかし、なんでクロムは頬を赤く染めながら高速タイピングを続けるのだろうか？なんて思いながらもカスミを触手で引き寄せ、同じように肩越しに掲示板を見るように急かす。

□月＄日

クロムとカナデを除いてギルドメンバーは女性で構築されている。実質、これは二大派閥のハーレムではないのだろうか？

そんなことを言えばイズにチョップされた。いや、イズの言っていたことを伝えんだが、そこまで怒るとは思わなかった。

あとで素材採取を手伝うから許してもらえると嬉しいかな。うん、まあ、イズの欲しい素材があるのは魔界みたいな場所なんだろうけど。

とりあえず、この新しく獲得した「魔蛸の吐き墨（クラーケン・ペースト）」は使うのは無理だと言いながらテキストを見せる。

そう、このスキルは墨の煙幕を唾液を吐き出すスキルなのだ。一応、これでも女なので唾液を出すのは恥ずかしい。まあ、これはこれで相手を煽る時には使えそうだけど。

可愛らしい装備を纏う三人を見ながらシロップと競走する覇王丸を応援する。なぜか覇王丸はニワトリなのにＡＧＩがカメより低いため、毎日のように競走してＡＧＩを上げようと頑張っているのだ。

クロムの「シロップも覇王丸も頑張れよ」という呼び掛けで部屋を駆け回っていたオトモの動きが止まり、クロムへと突撃していた。

これは不倫のバレた亭主のような構図だと思いながらも暴れる二匹を大人しくさせようと頑張っているクロムを応援する。